

# 明律研究会

代表 兒玉力哉（文学研究科M1） 副代表 松崎恵哲（文学研究科M2）  
 祈蘇曼（文学研究科D5） 白石廣太郎（文学部B4）

## 活動テーマ

元明時代の法制・宗教・社会の連続性

## 活動一覧～『事類纂』講読～

前年度からの継続メンバーである祈蘇曼や旧メンバーである猪俣貴幸・豊嶋順揮が中心となり『皇明條法事類纂』の講読を進めていった。その中で法制用語として頻出する「参語」の解釈に関する新たな論文が祈蘇曼によってまとめられた。

## 活動概要

本年度の明律研究会は、これまでの『事類纂』研究の継続と新規メンバーの修論・卒論に向けた史料の収集・読解・翻訳等を研究の中心に据える。欧米では「宋元明変革」と呼ばれることから、各研究分野である元明時代の白蓮教や留学生をとりまく社会の変化や連続性を法制、社会、宗教史料を総合的に利用し、明らかにしていく。又、同時期日本の社会や宗教界の観点も踏まえ、東アジア世界からの巨視的歴史理解にも努めていきたい。

## 活動一覧～蓬左文庫への史料調査～

今年度からの新メンバーである、兒玉力哉・白石廣太郎は旧メンバーである猪俣貴幸の指導の下で史料調査を行った。『南宮疏略』については『南宮奏議』と内容に相違ないことが判明し、同じ時代に同内容の選集が別の人から別の書名で出されていた状況を明らかにした。また、唯一の完本として現存する『高麗史節要』（重要文化財）についての調査という貴重な体験も実現でき、影印本からは確認できない「経筵」の朱印や、最後頁に附された景泰四年四月の印行記の内容の確認ができ、実物史料調査の醍醐味を味わうこともできた。



学芸員さんより『高麗史節要』についての説明を受けている様子

## 研究成果

- 祈蘇曼「明代の司法上奏における『参語』」（『立命館東洋史学』第46号 2024年）
- 豊嶋順揮「明中期における朝貢貿易と中国社会」（『立命館東洋史学』第46号 2024年）
- 兒玉力哉「元代『白蓮集団』への“公認”聖旨と禁令の理解—高麗忠宣王への検討を加えて—」（立命館東洋史學會大会）
- 白石廣太郎「明代における琉球王国による「明末官生派遣」に関する一検討」（立命館大学史学会例会）
- 兒玉力哉「藩王の役割から見る忠宣王—元代「白蓮集団」理解のための一視点」（2024ソウル・京都東アジア次世代フォーラム）